



「自立して生きていきたい」

よし ずみ と よ こ
吉住 と よ 子
1930年(昭和5年)
江戸川区雷(現東葛西)
生まれ、中葛西在住



■ 仕事で生きたい

「この子を女学校とドレメに入れて…」って遺言して、母は昭和14年、私が9歳の時に42歳で亡くなったんです。そのころ、4人きょうだいの長男は21歳で兵隊に行っていて、18歳と15歳の2人の姉が父と一緒に私を育ててくれました。

父は、母の遺言どおり、私が小学校を出ると5年制の女学校に入れてくれたけど、女学校の後2年間は和裁とお花を習いに行かされて。それから、ドレメではなかったけど、やっとな洋裁を習いに新宿の文化服装学院に行ったの。私は寮に入って一所懸命勉強をしたかったけど、「寮はだめ、家から通いなさい」って父が許してくれなくて。錦糸町行きのバスに乗って、電車に乗り換えて新宿まで通いました。

文化服装学院の本科を終わらして、高等裁断科の卒業間近の22歳のころ、担任の先生から「斉藤さん、日本橋三越から求人があるんだけど行きますか」って聞かれたの。「はい、行きます」って即答してから父に伝えたら、「職業婦人にするために学校に入れたんじゃない。女の子の芸のためだ。勤めて給料をもらわんでもいい」って叱られてしまったのよ。

「今は言論の自由があって、女でも思うことを言って、自分の考え方で生きていかなければならないんだから。現代の女性はイエスカノーかはっきり言うんです」って、愛読書の『婦人公論』や女学校で聞いたことを言うと、父は「正論だね。それで世の中が通れればいいけどね」って言ってましたね。

当時は、女の子はお嫁に行って主婦になるのが当たり前って思われていたのよ。職業婦人になったら嫁に行き損なうって。芸を身に付けるのは、お嫁に行ったら困った時のためということなの。結婚は娘を片付けることなんですよ。

私は、自分の生き方として仕事を選びたかったし、立体裁断のできるデザイナーになりたかったんです。だから仕事をして腕を磨きたかった。学校を出たばかりでは、商売人までいかない。どのような服でもスパッと縫えるようになって、自立して生きていきたいと思ったのに。でも、仕事をする許しが出ない。この家を出ないと私は自由にならない。

そうかと言って、黙って家を飛び出したら父が悲しむだろう。結局はお嫁に行かなきゃ家を出られないんだって思ったわ。

■ 雷(いかづち)の生活

「バンバンバン」という海苔切りの音が止むと雷の朝がくるんです。雷は、旧江戸川に面していて日本ロールという会社の所から浦安橋まで。昔は海苔業をやっている家がたくさんあって、うちの隣の隣の隣もみんな海苔屋さんだったんです。

斉藤家は350年続く家で、戦前は土地を貸すのが主でした。曾祖父は名誉職が好きで村長をしていたし、祖父も社交的で人のためにお金を使う人。働き者の曾祖母が商売をしていました。土地の人に酒、砂糖、乾物などを売りながら、今の西葛西の堤防の外側に茅場を買ってどんどん広げていったんです。

昔は遠浅で葦が採れたんですよ。夏刈りは短い海苔のすだれに、冬刈りは穂が出て長くなるので屋根の茅葺きの茅に使われていたんですよ。人に頼んで舟を出して刈って、女の人を頼んで良い物悪い物をより分けてもらい、干し上げて売ります。それが高く売れて儲かったみたいですね。困っている人にも気づかい、いろんなことをしていたひいおばさんだったのね。

父の代は地主の他に海苔漁をべか舟2艘でやりましたね。海苔採りは11月から3月の寒い時期にやるんです。海苔を採るための「べか舟」は、海苔網を張った柵と柵の間に入りやすい大きさで、一人で漕いで操るんです。

海苔は引き潮の時に採って来ます。すだれに載せて漕ぐ前に、海苔切り包丁で叩くんですけど、海苔切りは女の人仕事。夜中の12時ぐらいからやるんですよ。姉が叩いていると、男の人が起きてきて海苔漕ぎを始めるんです。全部たたき終わるともう4時ごろで、今度はお掃除してご飯。兄が結婚してからは兄嫁がやりましたね。

漕いだ海苔は裏表を天日に干してから、10枚ずつ重ねて折って一帖に束ねてでき上がり。漕ぎがうまく行かないと穴が開いたり、お天気が悪いと味がボケたりする。干しあげ方がうまくて、薄くても穴の無い海苔が高く売れ

るの。海苔作りはお金になるけど、忍耐がいる仕事で難しいですよ。

昔は雷、長島、仲割地区に海苔の仲買人がいて、できた海苔を夜に持っていきます。値段を決める人はすごい目が利くの。そういうプロの人たちの間で一番高く買ってくれる人の所に売りたいので、けっこう駆け引きがあるんですよ。

葛西浦で採れる海苔は、「浅草海苔」と呼ばれて最高級品で人気があったのよ。べか舟を2、3艘積んで運ぶ機械船を持ったり、雨の日でも乾燥できる石炭乾燥場を作ったりと大量生産する人もいましたね。葛西浦の海苔漁は昭和30年ごろが全盛期。東京湾の水質汚染や都市化の影響で、最後は昭和37年に漁業権を放棄してしまったんです。



◆べか舟を漕ぐ人々



◆海苔切り包丁

で買ったんです。希少価値の土地は値上がり率が良いので、後で高く売れましたね。

実家の父が最初の子どもが生まれてすぐに亡くなり、昭和47年ごろに田畑を相続したんですけど、区画整理事業が同じ時期に重なったんです。雷の人たちは、漁業補償や区画整理で入ってきたお金で立派な家を建てていましたね。私は昭和52年の秋に葛西に戻って来て、貸し駐車場を作ったら、時間駐車がちよこちょこ入ってくれて儲けがあったの。それからあちこちにビルなどを建てて、貸室業をするようになったんです。

人生に悔いなし

私は、私なりに一所懸命仕事をしてきて、気がついたらこの歳になっていました。今は200室ほどを管理していますが、女学校で運針の練習をしていたころは、まさか自分がこういう仕事をするようになるとは思っていませんでした。時代が変わって、環境が変わって、人に活かされて生きてきたんだと思うのね。

戦後、昭和23年に幣制切り下げがあってお金の価値が下がっちゃったでしょ。それでお金の価値って変わるんだって知ったのよね。曾祖母の商いぶりや珠算の先生からは、お金を使うことによって経済が回ってことを教わったわね。

女学校の校長先生は、「社会に出てお金の無い時は、やたらと借りたりしないで質屋さんに持って行って借りなさい。それが一番危なくない」と教えてくださった。やっぱり貯めるということ覚えておかないといけなのよ。利息を返すのが大変ですからね、無いから借りようじゃダメなんですよ。校長先生のおかげで、そういう考えが生まれました。

今は株をやってもだめだからやらない方がいいんですけど、私はスパッとやって、大きく損することはなかった。それで主人から「人にはない鋭さを持っている」と言われたんだと思うの。でも、買ったとか売ったとかっていうことに主人は何も言わない。主人という人は給料をもらうと袋のまま持ってくる。500円渡しておくといつまでも持っている人だったの。

私が今あるのは主人に自由にやらせてもらったおかげです。その結果、一人でも生きていける道につながったのよね。私、女性で得をしてきたと思いますよ。嫁ぎ先を決めてくれた父にも感謝しないとね。

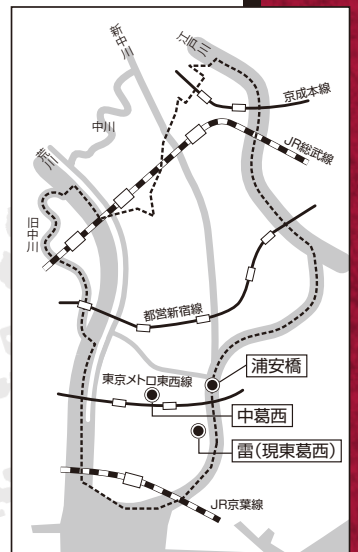
主人が5年前に亡くなる時、私が「一人で行くのは寂しいでしょ、一緒に行こうか」と言ったら、「だめだよ、俺の歳まで生きる」と。だから、私はもう少し頑張ります。

めぐり合い

父が私の結婚相手はサラリーマンが良いと言って、お見合いをして昭和29年、24歳で杉並区の高円寺にお嫁に行きました。父が「娘は家事も何もできませんよ」と言ったんです。そうしたら、主人になる人が「できなくてもいいですよ、僕も母も手伝いますから」と。父も「あのお母さんは百人に一人といないね。やさしいから大丈夫」と言うのでお嫁に行ったんです。

昭和30年8月に長男、34年9月に長女が生まれて、主人のお給料で暮らしていました。お給料を、お米代、教育費とかって、7つの袋に区分けしてやりくりしていたの。でも、それでは蓄えがない。私は主人の両親が病気になったり、お世話が必要になったりした時のためには貯金が必要だと思っていたの。そこに、主人の父が株投資をやっていて、「とよちゃんも買わないか」と言うので、私も貯めていた主人のボーナスで買ったら増えたのね。

ちょうど株が上がっていく時代だったんだけど、上がった分で買い足していったのね。でも、これは下がるなと思った時に全部売っちゃった。そうしたら13万円が400万円になって、300万円は主人の両親用に貯金。あとはお金で持っている価値が下がっちゃうから土地を買おうと思って、新宿の京王電鉄の不動産部門に行ったんです。「駅から5分位の所を買いたいのですが」と言って、沿線の駅近くの51坪を120万円



◆インタビュー／2011年5月
◆聞き手／蛭田佳子 伊藤直美 平野靖子
◆コーディネーター／磯谷真理子 樋口政則 小野塚和江
◆写真協力 江戸川区郷土資料室

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)